

長期自然体験村における子どもの情動体験と錯綜する身体

～日立市「山中友子隊」体験村を事例に～

教育学部 日下裕弘

1 研究の目的

「ゆとり」教育の意味も熟考されないまま、「学力」重視の教育へと「改革」が進んでいる昨今であるが、人間形成という教育の本質に関する問いが聞こえてこない。体験学習は、揺れ動く表層の教育とは異なる確かな「身体」（こころと結びついているからだ、すなわち、からだ・こころ）の成長を基底とする教育であり、したがって長期の体験学習は、現代の教育の本質的な問題に一石を投じる優れた営みであろう。

さて、宿泊を伴う比較的長期（1週間から31日）の自然体験（キャンプ）活動が、子どもたちの成長・発達に及ぼす影響に関する研究には、例えば、「自己概念」「一般性自己効力」に関するもの（飯田ら：1988¹⁾、影山ら：1988²⁾、飯田ら：1992³⁾、関根ら：1996⁴⁾など）、「内発的動機づけ」に関するもの（蓬田ら：2000⁵⁾など）、「self-control」に関するもの（黒澤ら：1999⁶⁾など）、「自然に対する態度」に関するもの（岡村ら：2000⁷⁾など）、「達成動機」「友人関係」「自然認識」に関するもの（岡村ら：2001⁸⁾など）、「有能感」「自己決定感」「他者受容感」に関するもの（蓬田ら：2001⁹⁾など）等がある。いずれも、心理学の領域の諸概念を詳細に吟味し、因子分析などの手法を用いて実証した緻密な研究である。また、長期（31日）の自然体験村に参加した中学生A子のケースを詳細に観察・記述することによって、彼女の「達成感」、「仲間との関係」、「優しさの実感」、「繰り返された学習サイクル」の実像を明らかにした質的な研究（中島ら：2000¹⁰⁾）もある。こうした研究の主たる課題は、総じて「自己概念の成長」といってよく、それらは、子どもの「生きる力」や「セルフ・アイデンティティ」の成長の問題に通底していると考えられる。星野（2004）¹¹⁾は、こうした自然体験活動の教育的効果に関するこれまでの研究成果として、①達成動機の向上、②有能感の向上、③自立心の向上、④他者受容・凝集性の向上、⑤自己決定感の向上、⑥自然意識・感性の向上、および、⑦道徳心・正義感との関連をあげている。

しかしながら、こうした「教育効果」の問題を、意識下の「身体（からだ・こころ）」や「情動」に焦点をあてて考察した研究は皆無である。また、子どもたちが体験した内容やその教育的効果、および、現在の子どもたちのありよう等（総じて「『生きる力』のありか」）を、参加した子どもたち、およびその保護者全員を対象に、過去5年間にさかのぼって追跡調査を行った研究も皆無である。

そこで、本研究は、日立市で続けられている長期自然体験活動「山中友子隊体験村」における子どもの身体（からだ・こころ）のありようを、「体験村」の実態の把握と5年間の追跡調査をもとに、主として市川浩の身体論とワロン（H. Wallon）の情動論の視点から考察することを目的としている。市川の身体論は、「体験」という「からだ・こころ」の現象を意識下の身体の問題として考察をするときの基礎的かつ重要な理論的示唆を含んでおり、ワロンの情動論は、市川と同じ意識下に情動という身体的、心理的、社会的な複合体を位置づけ、そのはたらきを最も重要なパーソナリティの発達要因としている点で、両者は、本研究の理論的枠組みとして適していると考えたからである。

2 研究方法・研究手順

本研究は、次のような手順で論を展開する。

- ① 市川浩の身体論、および、H. ワロンの情動論による分析枠組みの提示
- ② 「山中友子隊体験村」の実態把握
- ③ 調査と考察

2-1 市川浩の身体論およびH. ワロンの情動論による本研究の分析枠組み

市川の現象学的な身体論は、子どもたちの体験活動における錯綜する意識下の身体のはたらきや、「他者」（自然、仲間、規範など、自己以外のものをすべて含む）を練り込む身心メカニズムを読み解くのに極めて有意義であり、ワロンの発達心理学は、いわゆる「こころ」の領域を越えた社会的要因を重要な発達の契機とみなし、かつ、その基盤を「情動」という意識下の領域におき、自己概念や自己アイデンティティの変容を解き明かそうとしている点で、前者と同様、本研究にとって有意義な準拠枠であり、両者には、論理的な整合性があると考えられる。

市川浩¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾によれば、人間は、身体（からだ・こころ）への環境の意味を受動的にとらえ、わが身を調節しつつその環境の意味を変えることによって、指向のための条件をととのえ、環境に適応すると共に、自らにとって有意味な世界との新しい交渉に意識的、能動的に指向するという、いわば間-世界的、間-主体的存在であり、現実の未完成パズルを絶えず生成し続ける「断片的」統合体である。人間の行為は、その本質において、行為のその瞬間においてそのつど形成される心身の錯綜した生ける構造、すなわち「身」(み)として統合的に遂行され、その「精神は身体」として、その「肉体は精神」として複雑に絡み合いながら有意味に機能しつつ現象する。しかも、一人の行為者としての人間は、生後のさまざまな体験によってある程度習慣化された2つの「はたらきとしての構造」を持つ。ひとつは、意識的な顕在的統合である「志向的構造」(=「図」)であり、もうひとつは、意識下の潜在的な「向性的構造」(=「地」)である。前者は、現実の行為として最終的にひとつに統合された行動現象であり、後者は、その行動を潜在的に支え、規制し、方向づける前意識的な行動の統合可能性(=生存可能性)である。とりわけ後者は、意識下の身体を取り扱う本研究にとってきわめて重要な概念であり、市川はこれを「錯綜体」と呼ぶ。それは、一定の「ひろがり」と「量感」と「ベクトル」を持ち、あらゆる行動への「かまえ」として、現実の有意味な世界や環境を意識下において分節的に素描する行動可能性、すなわち行動への中間(緩衝)地帯であり、身体の「ゆとり」といっていい。

ワロン¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾によれば、人間は、はじめから「他者」へと開かれた「関係」的存在であり、他者を、その「身体・自我(心理)・社会」の複合する全体としての自己に練り込み、成長する。「身体的なもの」としてワロンが特に重視するのが「情動」(市川の「地」の部分に位置づけられる)である。喜怒哀楽などの情動は、他者との関係における身体的、心理的、社会的なるものの複合体であり、他者との関係において「表出」される。したがって、情動は「共同性」(市川の「間-主観性」)をその特徴とし、他者に「伝染」(市川の「感応」)する。この情動の成長こそが、人間(子ども)のパーソナリティの成長の基盤である、とワロンはいう。すなわち、人間は、外界からの刺激を受けると、外受容感覚を通して外界作用的活動を行い環境に適応するが、その際、情動の領域においては、「自己受

容感覚」(市川の「身体感覚」)や、「自己塑型的活動」(何気ない、あるいは、反射的な身体の「姿勢」)が随伴する。こうして練り込まれたさまざまな「他者」は、意識下の「第二の自我」「内なる他者」(市川の「錯綜体」として潜在し、複雑に関係し合いながら、後の行動への「態度」(市川の「かまえ」)として生きてはたらく。(図1)

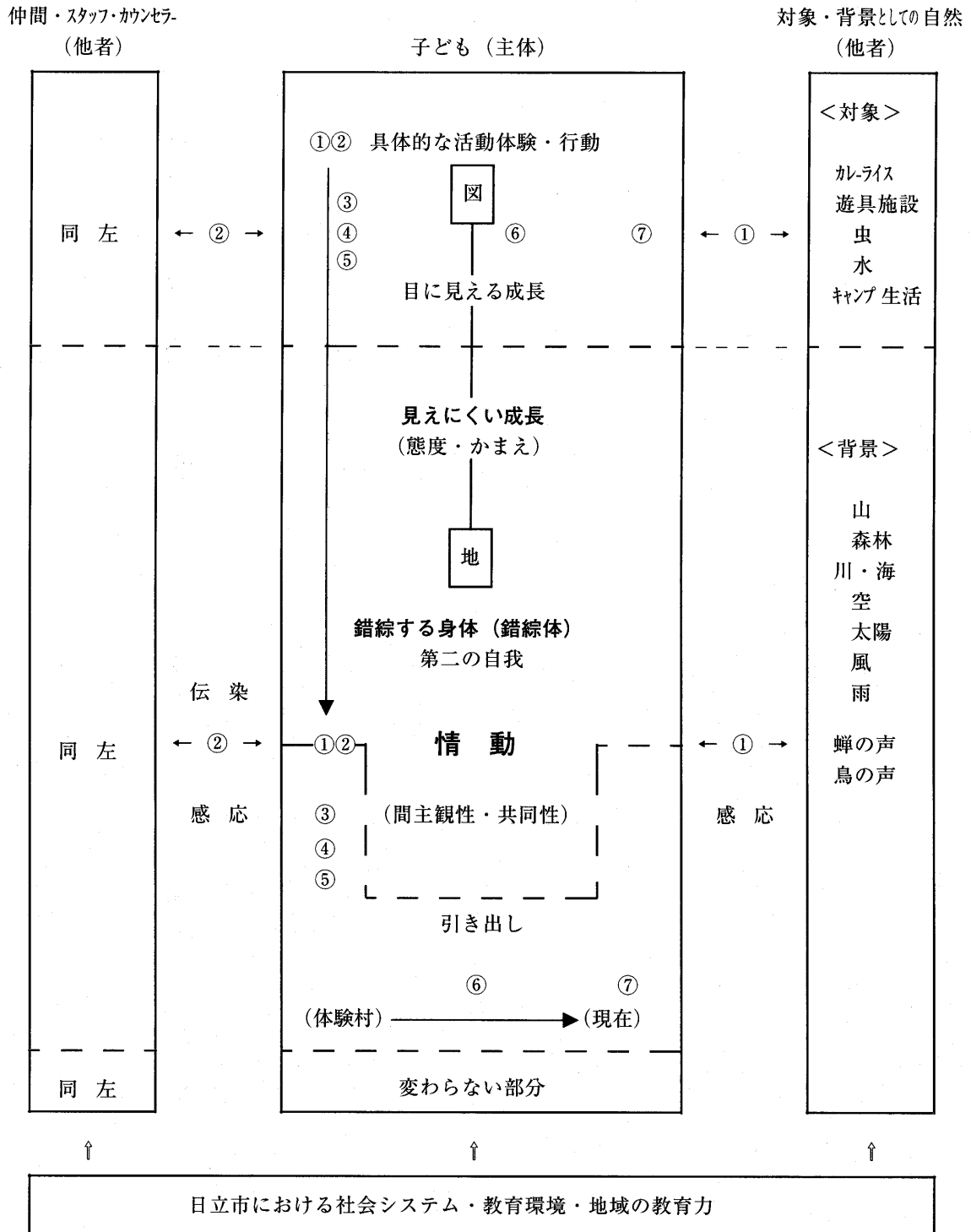


図1 「山中友子隊体験村」における子どもの身体

2-2 「山中友子隊体験村」について

2-2-1 概要

「山中友子隊体験村」とは、小学校4年生から中学校2年生までの男女を対象に、子どもたちの「生きる力」の成長を目指し、日立市教育委員会青少年課が、夏休みの29泊30日という長期にわたり、継続的に実施している自然体験学習である。それは、専門のスタッフや「カウンセラー」の指導・共援と、市長・教育委員会・実行委員会・一般市民・参加者の父兄・参加者OBなどの総勢500人の支援のもとで行われるキャンプであり、今年で5年目を迎えた。その具体的な活動内容には、アイスブレイク、じゃぶじゃぶ池水遊び、野外炊飯、秘密探検、ネイチャーゲーム、プロジェクト・アドベンチャー活動、牛の世話体験、ママチャリ・フルマラソン、絆泊（民泊）、禅寺体験、農業体験、長屋ハウスづくり、いかだづくりと川下り、ボランティア活動、戦争体験の話、友子会議、ファイナル・プロジェクト（23km ナイトウォークなど）等の体験活動が含まれている。

2-2-2 調査

1) 実態の把握

以下のものを通して「山中友子隊体験村」の実態を把握した。

- ・平成12～15年の「山中友子隊体験村」の報告書¹⁹⁾の分析
- ・平成12～15年の「山中友子隊体験村」のビデオ²⁰⁾の分析
- ・平成16年の「山中友子隊体験村」の参与観察

2) 追跡調査

追跡調査の目的、対象、内容、方法、回収率は、次のとおりである。

[目的]

調査は、山中友子隊体験村に参加した子どもたちの情動体験の内容と、意識下の身体に練り込まれたそれらの体験内容が後の子どもたちの行動や生活にどのように生かされているかを、子どもたち自身および保護者の回答から明らかにすることを目的とした。

[対象]

対象は、2004年度および過去の5年間に参加した子どもとその保護者全員である。

[内容]

本研究の分析枠組みにそって、日立市教育委員会青少年課の方々との共同で、調査票を作成した。本調査の内容設定にあたっては、茨城大学子どもの遊び研究会が毎年実施している「夏休み子どもの自然遊び合宿体験活動」（4泊5日）において、アンケート項目への子どもの理解度を予備的に調査し、小学校4年生でも十分に理解できる質問項目を設定した。調査の内容は、次のとおりである。

〈子ども用アンケート〉

- ・参加年度、性別、参加当時の学年、参加動機（本人の希望か、親が関与したか）
- ・情動体験の内容（主として自由記述）
- 体験村を振り返って：体験村の記憶、一番「印象に残った」「頑張った」「感動した」「楽しかった」「達成感を感じた」「苦しかった・つらかった」「悲しかった」「怒った・むかついた」「怖かった」「不自由だった・我慢した」こと、自信がもてたか、仲間と協力し

たか、けんかをしたか、こころが通じあったか、自分を見つめられたか、友達はできたか、自然とのふれあい、など。

- 現在のあなたは？：体験を宝だと思っているか、ミサンガを大切にしているか、体験終了後あなたは変わったか、それはどういうところか、現在の生活に役立っていることは、今でも続いている友達はあるか、学校生活での積極性、など。
- 体験村のOBとして、など。

〈保護者用アンケート〉（主として自由記述）

- 体験村へ参加させて：期待したこと、心配したこと、子育てにプラスになっているか、接し方は変わったか、など。
- お子さんはどのように変わったか：目に見えて変わったところ、今は見えないが将来に生かされると思うところ、現在の生活に生かされていること、マイナスに影響したこと、など。

[方法]

平成16年10月20日から同11月5日までの約2週間、アンケートの郵送による悉皆調査を行った。また、同9月、12月、2月に行われた保護者や関係者の反省ミーティングにおいてヒヤリング等を行った。

[回収率]

それぞれの年度の参加者数、および、アンケートの回収率は、表1のとおりである。

表1 各年度の参加人数、回収率、実施期間

参加年度	参加人数	回収数（回収率）	実施期間
平成12年度（第1期）	32	7（21.8%）	29泊30日
平成13年度（第2期）	32	13（40.6%）	29泊30日
平成14年度（第3期）	34	16（47.1%）	29泊30日
平成15年度（第4期）	30	18（60.0%）	29泊30日
平成16年度（第5期）	30	25（83.3%）	14泊15日
全体	158	79（50.0%）	

回収率は、年度をさかのぼるにつれて低くなっている。特に、平成12年度は、21.8%と最も低く、この年度に関しては、単純な統計的処理による考察を行うことはできない。また、平成16年度の実施期間は14泊15日であり、このことも勘案すべき点である。

3 調査結果と考察

3.1 キャンプ生活の始まりと体験活動全体の流れ

体験村は、「取立式」で始まった。親、全体OB、スタッフ、大会実行員、市長や教育委員会の方々に見守られ、聖なる水と、ミサンガが与えられた。アイスブレイクやじゃぶじゃぶ池での水遊びで始まった活動は、当初（1週間ぐらい）、子どもたちにとっては初

めでの経験が多く、見知らぬ仲間・スタッフ、そして自然の中でのテント生活（毎食が自炊）に疲労やとまどい・不安があった。同時に、親も、毎日ホームページでわが子の活動状況をチェックするなど、心配の日々が続いた。一方、スタッフも、連日の子どもたちとの共援や日記の交換などで睡眠不足の日々が続いた。しかし、子どもたちもスタッフ／カウンセラーも、2週間目ぐらいからは、こうした環境に慣れ、「同じ生活のリズム」で活動することができるようになった。

自然や仲間との世界・環境に慣れてきた8日目頃から、子どもたちには、さまざまな課題を含んだプログラムが提供される。米国の「プロジェクト・アドベンチャー」をモデルとするそれらのプログラムには、成功と失敗の両方の体験がしくまれており、子どもたちは「ふりかえり」を繰り返し、頑張っ、仲間と協力しながら、問題を解決し、課題を達成していく。こうした緊張の時間とその間隙の弛緩（遊び）の時間を繰り返し、子どもたちは「ファイナル・プロジェクト」（最大の難関）を向かえる¹⁹⁾²⁰⁾。

こうした活動をとおして、子どもたちは、意識的（知的）経験と同時に、意識下の身体において、深い「情動」の体験をした。以下、図1の番号（①～⑦）にしたがって結果を考察する。

3. 2 情動の体験

[体験村をふりかえって]

各年度の参加者の構成、プログラム、スタッフ、自然条件等には多少の違いはあったが、子どもの体験内容に関するかぎり、各年度別の差は、ほとんどなかった。

① 〈自然・アウトドアライフ体験〉

自然とのふれあいが「十分にできた」と応えた子どもが、各年度を通じて8～9割以上であり（Ⅰ期・12年度：85.9%、Ⅱ期・13年度：84.6%、Ⅲ期・14年度：93.8%、Ⅳ期・15年度：88.9%、Ⅴ期・16年度：88.0%）、（以下、Ⅰ期の場合ならば「Ⅰ：85.9%」と略す）、「いいえ」と応えた子どもはまったくいない（全体：0%）。

各年度を通じて、「キャンプ生活」（テレビを見れない、テントでの共同生活・睡眠、自炊、洗濯、ドラム缶風呂、暗い外のトイレ、気持ち悪い虫など）そのものが「楽しい」反面、「一番不自由だった・我慢した」（Ⅰ：71.4%、Ⅱ：53.8%、Ⅲ：50.0%、Ⅳ：38.9%、Ⅴ：48.0%、全体：52.4%）、「一番怖かった」（Ⅰ：14.3%、Ⅱ：53.8%、Ⅲ：25.0%、Ⅳ：44.4%、Ⅴ：40.0%、全体：35.5%）、「一番嫌だった」（Ⅰ：14.3%、Ⅱ：38.5%、Ⅲ：12.5%、Ⅳ：22.2%、Ⅴ：36.0%、全体：24.7%）と応えた子どもが最も多かった。

体験村という豊かな自然環境の中で活動した子どもの身体は、「環境－内－存在」として、「背景としての自然」とのかかわりを意図的に自覚することなく、いわば前意識的に把握している²¹⁾。その時、主体と環境との相互的な規定性に基づいた「気分づけられた空間」(O. F. ボルノウ 1998)²²⁾が生成し、意識下（「地」）のより表層部分に烙印される。そこでの身体は、「世界－内－存在」として、身近にある（活動の対象としての）自然を意識的に注視し「図化」する一方で、意識下においては、その周囲にある木々の緑やせみの声、風のたわむれや水の流れ（背景としての自然）を潜在的に「地化」している。

感じることは、自然への能動的な志向作用と身体の受動的な「パトス」との同時的感覚である。すなわち、体験村の広大な風景を「視たり」、水の心地よい冷たさに「ふれる」

ことは、身体の志向的構造において、その広大さやその冷たさを差異化・分節化することであると同時に、身体の「地」のレベルにおいては、広大な自然に「視られ」、冷たい自然に「ふれられる」こと（自然からの自己表現）、いわば、向こうからのパースペクティブによって「とらえられる」ことであり、「目に見えない自然」や「自然の摂理」を子どもたちの身体が感じることを意味する。子どもたちは、それらの感覚の直接性を通じて自然と交流し、みずからの身体性を再生するのである。それは、主体的身体と自然との「かわり（対他的な相互性）」や「ひびき合い（関係的構造）」を通じて自己の「対象としての身体」や「対他物身体」を把握し、自己の「内なる自然が見えてくる」ことであり、新しい自己を発見すること、新しい「実存感」「自己感」の開示なのである。それは、湯浅泰雄の身体論²³⁾における「全身内部感覚」（セネステーシス）、さらには、喜怒哀楽（情動）や自律神経系にかかわる深い「情動－本能回路」に通じていよう。それは、「自然的存在としての人間の根源的欲求」であり、いつか「引き出されるもの」「浮上させられるもの」として、子どもたちの疎外された身体に「安定した不確定性」をもたらす²⁴⁾。

② こうした自然を媒体とした仲間との交流には、前コミュニケーション・レベルでの「対他的相互関係」における一種の「疎通性」（ラポール）があり、ある気軽な開放感、気安さ、うなずきの感じをもち、思考と感情が「共通のリズム」で流れており、「同じ波長の波にのっている」「触れ合っている」という感じがある。「心が通い合った」「かわりが深まった」という、同じ自然を体感した仲間とのこの「感応的同調」は、相手の情動を自分の情動として了解する、いわば「共振」であり、「地」のレベルにおける多次的で複雑な間身体的かわりとしての「（自然）感応的－構造的同一化」がその基盤にある。

③ 〈「がんばり」の体験〉

「体験村での目標」としては、全体を通じて、「がんばること」と応えた子どもが最も多く（Ⅰ：57.1%、Ⅱ：7.7%、Ⅲ：25.0%、Ⅳ：33.3%、Ⅴ：32.0%、全体：31.0%）、その目標を「達成できた」と応えたものが全体の70.2%、「まあまあ達成できた」が26.5%、「達成できなかった」が2.1%であり、ほぼ全員が何らかのかたちで自分の立てた目標を達成できたといっている。また、「何にでもやる気をもって挑戦し、一生懸命がんばりましたか」という質問に対して、「はい」と応えたものが全体の78.3%、「まあまあ」が19.4%、「いいえ」が0.8%と、皆が、「やる気」をもって「がんばった」。その結果、「自分はやればできるという『自信』がもてた」とするものが全体の65.0%、「まあまあ、もてた」が31.0%、「もてなかった」がわずかに4.1%であった。

各年度を通じて、特に、「ファイナル・プロジェクト」（「思い出めぐりナイトウォーク100km」など、子どもたちが自分たちで相談をして決めた最後の課題・難関）、「42km ママチャリ・フルマラソン」、「トモコアドベンチャー」（PAのハイエレメントやローエレメント等）の3つは、子どもたちが「がんばった」活動としてあげたプログラムであった。とりわけ「ファイナル・プロジェクト」は、子どもたちにとって、「一番苦しく・つらい」活動であったにもかかわらず（全体：45.0%）、「一番がんばった」活動であり（全体：37.3%）、かつ「一番印象に残り」（全体：42.9%）、「一番感動し」（全体：50.7%）、「一番達成感を感じた」活動であった（全体：52.2%）。

このように、苦しいことや困難をがんばって乗り越え、感動し、達成感を感じた情動の体験は、子どもたちの意識下の身体に、「がんばりチャンネル」とも呼ぶべき一種の「引

き出し」を生成した。このチャンネルにはさまざまな行動パターン、すなわち、同じ行動を繰り返し行うこと、失敗をする度に別のアプローチを試みること、仲間と試行錯誤し弁証法的に問題を解決することといったパターンがあり得る。子どもたちは、可能な選択肢の中から自分たちの能力とその状況に最も適すると考えた方法でがんばった。偶然と必然の両方を含んだこれらの現実的な行動の様相を、かりに「がんばりモード」と呼ぶなら、子どもたちは、この「がんばりチャンネル」と「がんばりモード」を身体の深い層に練り込んだことになる。とすれば、子どもたちは、M. チクセントミハイが心理学的な視点から提示した「フローのチャンネルを上下に逸脱しつつ物事を深めていくというパターン」²⁵⁾を、自らの身体(からだ・こころ)をもって例証したということができる。

④ 〈間主観・共同・社会体験〉

このがんばりの体験課題を、子どもたちは、「仲間との共感・協力・助け合い・励まし合い」(全体:51.0%)と、「自分の努力」(全体:27.7%)で乗り越えた。何事にも「仲間と力を合わせて取り組んだ」(全体:77.1%)。また、壁につきあたった時、座礁にのりあげた時、解決できない問題が起こった時、そこには常にスタッフやカウンセラーがいた。このカウンセラーの存在も重要な支えであった。

シュタイナーによれば、子どもたちは、こうした身近な信頼できるスタッフやカウンセラーをとおして、「より上位の権威者」、すなわち、人としての倫理観や正義感、生活する上での道徳心を学ぶ²⁶⁾。

子どもたちにとっては、スタッフやカウンセラーも含めたこの「仲間」の存在がきわめて大きかった。体験村で、子どもたちが「一番楽しかった・嬉しかった」のは、この「仲間・友達」の存在であり(全体:20.6%)、次いで、「キャンプ生活」(全体:19.6%)、「トモコアドベンチャー」(全体:7.4%)であった。

仲間との人間関係では軋轢もあった。子どもたちは「けんか」もした(全体:52.0%)。「一番怒った・むかついたこと」もこの「仲間」との関係であった(全体:7.4%)。しかし、子どもたちはこの「意見の違い」を、「話し合い」(全体:47.5%)や「ゆずりあい」「我慢」「相手に合わせること」(全体:13.8%)によって乗り越えた。こうした社会体験は、子どもたちに「自分自身をよく見つめる」機会を与えた(全体:「はい」41.3%、「まあまあ」46.8%、「いいえ」10.7%)。それは、「がんばれる自分」であり(全体:24.4%)、「仲間・友達と支え合う自分」であり(全体:12.8%)、また、「プラス志向の自分」(全体:12.3%)、「マイナス志向の自分」(全体:15.0%)でもあった。この紆余曲折を体験しながら、子どもたちは「とても仲の良い友達」をつくった(全体:95.7%)。だからこそ、この仲間・友達・スタッフとの「閉村式での別れ」が「一番悲しかった」(全体:33.0%)。閉村式での子どもたちの涙は、関係者はもちろん、体験村のビデオの視聴者でさえ、共感と涙を生んだ。

子どもたちは「仲間」と喜怒哀楽を共にした。快感、恐れ、おじけ、涙を共有した。仲間とのこの開かれた間-主観的な場に、子どもたちは「新しい自分」を発見した。それは「関係的存在としての自己アイデンティティ」の発見であり、主体(「私性」としての身体と、客体としての身体(客観的に見える自分=「対象身体」、仲間映った自分=「対他物身体」、そうした関係において行動する・役割を演じる自分=「対他身体」、仲間の笑顔=「他者の身体」に思わず微笑む自分)の発見である。子どもたちは、その過程を通じて、「二次的」「対自=対他的」な自己アイデンティティを確認し²⁷⁾、「第2の自我」²⁸⁾、す

なわち、「新しい身体アイデンティティ」を形成した。

ワロンによれば、この「共鳴」は「集団」の中で「伝染」する²⁹⁾。苦楽を共にした仲間との間には「絆」が形成され、ファイナル・プロジェクトを乗り越えた閉村式までには、「情動の一貫したシステム」としての「上位の個人」³⁰⁾ともいふべき集団的な絆（「家族」としての山中友子隊）が醸成された。

⑤ 〈いわゆる「教育効果」〉

「体験村終了後、あなたは変わりましたか？」という質問に、「はい」と応えた子どもが全体の46.1%、「まあまあ」が40.6%、「いいえ」が12.6%であった。また、「変わったところ」として子どもたちが応えた内容（自由回答）には、回答数の多い順に、「思いやり」（全体：16.6%）、「生活力」（全体：11.8%）、「積極性」（全体：8.2%）、「行動力」（全体：7.1%）、「自信」（全体：6.7%）、「がんばる力」（全体：6.2%）、「協調性」（全体：3.7%）、「たくましさ」（全体：3.5%）、「集中力」（全体：1.3%）、「その他」（全体：10.9%）とカテゴライズできるものがあった。表2は、同様の質問への保護者の見解である。

表2 「目に見えて」子どもの身についた「生きる力」（保護者の見解）

（複数回答） N = 79

がんばる力	思いやり	行動力	積極性	協調性	集中力	創造性	その他
31人 (39.20%)	28人 (35.40%)	28人 (35.40%)	27人 (34.20%)	22人 (27.80%)	5人 (6.30%)	4人 (5.10%)	考える力、文章力、自制心、自我形成、やりとげる力、責任感、など。

こうした「人間的活力」³¹⁾は、体験村が終了した時点では、子どもたちの身体の確かな「引き出し」として練り込まれたといい。また、体験を繰り返すことで習慣づけられた部分もある。例えば「料理」がそうである。子どもたちは、毎食、自分たちの手で料理をし、後片づけをした。そうした行動の反復は、子どもたちの身体に「習慣」（湯浅流に言えば、「習慣身体」³²⁾）として植えつけられた。いずれにせよ、体験村は、さまざまな情動の体験を通して、子どもたちの身体にこうした「生きる力」を練り込んだ。体験村が終わり、家族に迎えられた時の子どもたちのあのたくましい姿（身体）が何よりも雄弁にそれを物語っている。（こうした教育効果については、女兒の方が男児より若干高い傾向が見られた。女兒は、特に「社交の感性」ともいふべき効果が若干高い。さらに、参加当時の学年が低い子どもは「情緒的・感情的な側面」の効果が、高学年の子どもは「象徴的・理性的側面」の効果がやや高い傾向が見られたが、こうした性差や年齢差についての考察は、紙面の都合で割愛する。）

3.3 錯綜する身体

〔現在のあなた（その後）〕

「体験村での体験が、現在の生活に役立っていますか？」という質問に、「はい」と応えた子どもが全体の65.5%、「まあまあ」が27.8%、「いいえ」が6.0%であった。役立っている

る内容（自由回答）は、順に、「生活力」（全体：35.1%）、「自信」（全体：18.6%）、「がんばり」（全体：12.3%）、「仲間・友達」（全体：9.7%）、「その他」（全体：3.6%）、「無回答」（全体：20.8%）であった。また、子どもたちは、体験村でのこうした体験を「未来に役立てたい」と思っている（「はい」70.7%、「まあまあ」18.9%、「いいえ」10.4%）。友達関係では、体験終了後「今でも続いている友達」がおり（全体：75.4%）、体験村以外でも同じように「仲の良い友達」がいる（全体：88.9%）と応えている。さらに、子どもたちは、現在、「自分の好きなことや大切なことに夢や希望をもち、目標を立てて思いきり挑戦」しており（全体：「はい」52.5%、「まあまあ」30.2%、「いいえ」17.3%）、「OBとして、今後の体験村のお手伝いをしたい」（全体：「はい」82.3%、「いいえ」17.7%）と応えている。

一方、保護者自身も、長期間離れて暮らしたことが「子育てにプラスになっている」（「はい」49.0%、「ある程度」39.0%、「いいえ」9.0%）、「当時を振り返って子どもと話しをすることがある」（「はい」43.0%、「ある程度」51.0%、「いいえ」6.0%）といている。また、「体験村が終わっても、子どもが今でも続けていることがある」と応えた保護者は、全体の46.0%（「ない」53.0%）であり、その内容には、「お手伝い」「料理」「仲間・友達」「OB会」「主体性」などがあげられていた。同様に、「家庭や学校などの生活に生かされている」内容には、「お手伝い」「料理」「積極性・自主性（主体性）」「学校でのリーダーシップ」「仲間・友達」「協調性・協力」「優しさ」などがあつた。さらに「今は見えないが、将来に生かされる部分があると思う」と応えた保護者は、全体の99.0%（「思わない」1.0%）にも及んだ。その内容は、表3のとおりである。

表3 「今は見えないが、将来に生かされる」と思う「生きる力」（保護者の見解）

（複数回答） N = 79

がんばる力	自信	協調性	生きる力	仲間・友	夢	心	わからないが、何か	無回答
20人 (25.30%)	13人 (16.50%)	10人 (14.90%)	5人 (12.70%)	5人 (12.70%)	2人 (2.50%)	1人 (1.30%)	11人 (13.90%)	12人 (15.20%)

⑥ このように、体験村での体験は現在でも生きてはたらいしている。「引き出し」が顕在化する仕方は、前述の「料理」や「お手伝い」のように習慣化されたことによるもののほかに、上述の調査結果が示す「教育効果」のように、潜在する複数の「引き出し」とさまざまな形で錯綜しつつ、状況に応じて、個性的に現実化されたことによるものがある。この錯綜の仕方について、ワロンは、情動が全体として相互に影響し合うことを前提としながらも、プラスに作用する「強化」「接続」「転化」「転移」など、総合的に作用する「統合」「混合」「変化」「協同」「協応」「妥協」など、マイナスに作用する「競合」「離反」などといった事例をあげている。しかも、その「きっかけ」「橋渡し」は、「条件反射的」である場合もあれば、「偶然的」である場合もあるとワロンはいう³³⁾。今回の追跡調査では、これらの具体的な錯綜の仕方を例証することはできないが、ワロンのこの情動論は、体験村終了後の子どもたちの身体における「あり得る錯綜の仕方＝可能態」を明確に提示している点で重要である。

例えば、参加動機別にクロス集計すると、親の勧めや説得等が関与した子どもより、「本人の意志のみで参加した」子どものほうが、「キャンプ生活やアドベンチャーもさほど怖くない」(p < 0.01)、「現在、好きなことや大切なことに夢や希望をもち、目標を立てて思いっきり挑戦している」(p < 0.01)、「体験村を継続し、1ヶ月にしてほしい」(p < 0.05)と、体験村が終了した現在の生活においても主体的・積極的な態度をもつものの割合が多い。この事実は、もともと主体的・積極的な「引き出し」が、体験村の活動を通じてさらに「強化」され、現在でも行動に顕在化している好例である。反対に、体験村で得た「自信」が、終了後の家庭や学校の環境によって「競合」「離反」し、屈折した反社会的な行動をとらせてしまう可能性も理論的には否定できない。このマイナスの作用を防ぐためには、その後の生活における絶えざる「ふりかえり」「観念化」による情動の理性化、すなわち「通路づけ」が必要である、とワロンはいう³⁴⁾。

⑦ しかしながら、表4に示した質問（および回収率）に関しては、明らかな年度の差が見られた。これらの結果は、体験村での経験を通じて子どもたちの身体に練り込まれた「引き出し」が、その後の生活において持続的に「通路づけ」られない限り、時を経るにしたがって意識下のより深い層に「沈み」、やがては「忘れられる」ということを意味している。子どもたちは、体験村のことを一時的にせよ「忘れる」ことによって、元の生活に復帰し、現実の新しい環境に適応していったのである。シュタイナーによれば、「一定期間集中して学んだこと」は、次の学びが行われるとしばらく（ある一定期間）忘れられるが、この「忘れる」ということは、消え去ることではない。否、忘れられたその内容は「潜在意識下」で作用し続け、前進的にうごめき、「魂」を活発にする。忘れることは、眠りの作用と同様、その内容が「一定期間子どもの意識下・無意識のなかで活動」し、むしろ「エーテル体」（生命力）を活発にする。そうして、ある適切な条件の元で「再び意識のほり」、子どもの魂を発達させ、成長させるというのである³⁵⁾³⁶⁾。適切な条件とは、ワロンのいう適切な「観念化」がなされることを意味している。

表4 「年度差」がみられた質問項目

(%)

年度 質問項目	I 平成12年度	II 平成13年度	III 平成14年度	IV 平成15年度	V 平成16年度	カイニ乗検定 (有意差)
「体験村のことを はっきりと覚えて いますか？」	はい 14.3 まあまあ 71.4 いいえ 0.0	はい 30.8 まあまあ 69.2 いいえ 0.0	はい 50.0 まあまあ 50.0 いいえ 0.0	はい 66.7 まあまあ 33.3 いいえ 0.0	はい 88.0 まあまあ 12.0 いいえ 0.0	p<0.001
「今でもミサン ガを大切にして いますか？」	はい 28.6 まあまあ 57.1 いいえ 14.3	はい 69.2 まあまあ 30.8 いいえ 0.0	はい 100.0 まあまあ 0.0 いいえ 0.0	はい 83.3 まあまあ 5.6 いいえ 0.0	はい 68.0 まあまあ 20.0 いいえ 8.0	p<0.05
「現在、自分 に自信がもて ていますか？」	はい 14.3 まあまあ 71.4 いいえ 14.3	はい 38.5 まあまあ 53.8 いいえ 7.7	はい 37.5 まあまあ 37.5 いいえ 25.0	はい 50.0 まあまあ 50.0 いいえ 0.0	はい 68.0 まあまあ 32.0 いいえ 0.0	p<0.05
(回収率)	21.8	40.6	47.1	60	83.3	p<0.001

4 まとめ

以上の実態調査および過去5年間の追跡調査の考察を総括すると次のようになる。

4-1 情動の体験

「友子隊」の情動体験に関するかぎり、年度差はほとんどなかった。

① 自然・アウトドアライフ体験を通じて、子どもたちは、活動の対象としての自然を意識的に「凶化」する一方で、背景としての自然を潜在的に「地化」し、自己の内なる自然を発見した。それは新しい自己感の開示であり、いつか引き出されるものとして、その身体に安定した不確実性をもたらす。

② 仲間と同じ自然を体感したという「感応的同調」は、子どもたちの身体における「共振」であり、「地」のレベルにおける「(自然)感応的-構造的同一化」がその基盤にある。

③ 困難を乗り越えた情動の体験は、子どもたちの身体の深い層に、「がんばりチャンネル・モード」とも呼ぶべき行動様式を、いわゆる「引き出し」として練り込んだ。

④ 子どもたちは、困難を仲間と共に助け合って乗り越え、喜怒哀楽を含めた様々な情動を共有した。「他者」とのこの間主観的な関係を通じて、子どもたちは「新しい身体アイデンティティ」を形成した。仲間とのこの情動の共有が、やがて、集団的な「絆」を醸成した。

⑤ 子どもたちは、体験村の情動体験を通じて、思いやり、生活力、積極性、行動力、自信、がんばる力、協調性、たくましさ、集中力などといった「人間的活力」を練り込んだ。

4-2 錯綜する身体

⑥ 練り込まれた「引き出し」は、潜在する複数の「引き出し」と様々な形で錯綜しつつ、状況に応じて、個性的に現実化する。

⑦ しかし、絶えざる「ふりかえり」「観念化」が行われな限り、練り込まれたものは「忘れられる」。しかし「忘れる」ことは、それが消え去ることではなく、むしろ、潜在的に、意識下の「人間的活力」「生きる力」に作用している。

4-3 今後の課題

錯綜する身体のありようをより詳細に考察するために、事例的な調査・研究を行うことが今後の課題である。

文献

- 1) 飯田稔・井村仁・影山義光 (1988) : 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容、筑波大学体育科学系紀要、11 : Pp. 79 - 86
- 2) 影山義光・飯田稔 (1988) : 大学キャンプ女子参加者に対する因子分析を用いた自己概念の変容、筑波大学体育科学系紀要、11 : Pp. 139 - 144
- 3) 飯田稔・関根章文 (1992) : キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果、筑波大学体育科学系紀要、15 : Pp. 93 - 102
- 4) 関根章文・飯田稔 (1996) : キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果、筑波大学体育科学系紀要、19 : Pp. 85 - 89
- 5) 蓬田高正・飯田稔・井村仁・関智子・岡村泰斗 (2000) : 長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響、野外教育研究、3 - 2 : Pp. 13 - 22
- 6) 黒澤毅・飯田稔・橘直隆・庄司一子 (1999) : キャンプ経験が児童・生徒の self - control に及ぼす影響、野外教育研究、2 - 2 : Pp. 29 - 36
- 7) 岡村泰斗・飯田稔・橘直隆・関智子 (2000) : キャンプにおける環境教育・冒険教育プログラムが参加者の自然に対する態度に及ぼす影響の比較研究、野外教育研究、3 - 2 : Pp. 1 - 12
- 8) 岡村泰斗・飯田稔・関智子 (2001) : 子ども長期自然体験村事業に関する評価研究、レジャー・レクリエーション研究、44 : Pp. 1 - 9
- 9) 蓬田高正・飯田稔・井村仁 (2000) : 長期自然体験が参加者の有能感、自己決定感、他者受容感に及ぼす影響 - 上位群・下位群による比較 -、日本野外教育学会第13回大会 : Pp. 74 - 75
- 10) 中島豊・沼尻千春・佐藤初雄 (2000) : 子ども長期自然体験キャンプの効果と意義 ~ 「長坂町子ども長期自然体験」における中学生 A 子の事例をもとに ~、『長坂町子ども長期自然体験村』1999年7月23日(金) ~ 8月22日(日) [30泊31日] 報告書 : Pp. 1 - 23
- 11) 星野敏男 (2004)、『体験ワークショップ : 野外での体験学習法』(資料)、「教育改革と体験学習法全国ミーティング2004 ~ 学校教育に生かす体験学習法 ~」(於 : 宮城県国立花山少年自然の家)、2004年10月30日、13 : 30 ~ 17 : 10
- 12) 市川浩 (1977)、身体の現象学、河出書房新社、Pp. 263
- 13) 市川浩 (1984)、〈身〉の構造 : 身体論を超えて、青土社、Pp. 218
- 14) 市川浩 (1990)、〈中間者〉の哲学 : メタ・フィジックを超えて、岩波書店、Pp. 300
- 15) 市川浩 (1992)、精神としての身体、岩波書店、Pp. 338
- 16) H. ワロン (1965)、久保田正人訳、児童における性格の起源 : 人格意識が成立するまで、明治図書、Pp. 270
- 17) H. ワロン (1983a)、竹内良知識、子どもの精神発達、人文書院、Pp. 248
- 18) H. ワロン (1983b)、浜田寿美男訳編、ワロン / 身体・自我・社会、ミネルヴァ書房、Pp. 267
- 19) (報告書) 日立市青少年センター「山中友子隊体験村実行委員会事務局」編・発行、(2000)・(2001)・(2002)・(2003)、山中友子隊体験村 30days 日記、Pp. 124、Pp. 128、Pp. 131、Pp. 112
- 20) (ビデオ) 日立市青少年センター「山中友子隊体験村実行委員会事務局」編・発行、(2000)・(2001)・(2002)・(2003)、山中友子隊体験村 30days 日記 (ストーリー) ~ 小・中学生による 29泊30日超ロングキャンプの記録 (『生きる力』を育む長期自然体験事業) ~、90分・90分・90分・90分
- 21) 市川浩 (1992)、前掲書、Pp. 169 - 172
- 22) O. F. ボルノウ (1988)、大塚他訳、人間と空間、せりか書房、Pp. 217 - 219
- 23) 湯浅泰雄 (1986)、気・修行・身体、河出出版社、Pp. 70 - 86
- 24) 市川浩 (1992)、前掲書、Pp. 27 - 49、124 - 136
- 25) M. Chikszentmihalyi (1990)、“Flow ; The Psychology of Optimal Experience”, Harper Perennial, A division of Harper Collins publishers, Pp. 72-77
- 26) 広瀬俊雄 (1988)、シュタイナーの人間観と教育方法 ~ 幼児期から青年期まで ~、ミネルヴァ書房、Pp. 229

- 27) 市川浩 (1992)、前掲書、Pp. 71 - 115
- 28) ワロン (1983b)、前掲書、Pp. 114 - 117
- 29) ワロン (1965)、前掲書、p. 92、154
- 30) ワロン (1983b)、前掲書、Pp. 176 - 177
- 31) B. M. ニューマン・P. R. ニューマン (1988)、福富護訳、新版生涯発達心理学～エリクソンによる人間の一生とその可能性、川島書店、Pp. 540
- 32) 湯浅泰雄 (1986)、前掲書、Pp. 74 - 76
- 33) ワロン (1965)、前掲書、p. 75、Pp. 108 - 112、p. 128、151、208
- 34) ワロン (1965)、前掲書、p. 96、109、153
- 35) R. シュタイナー (1985)、佐々木正昭訳、現代の教育はどうあるべきか、人智学出版社、Pp. 248 - 249
- 36) 広瀬俊雄 (1988)、前掲書、Pp. 68 - 73、183 - 184